

自己を見つめ、これからの生き方について 考えを深める児童を育てる道徳科学習指導

自他の思いや考えを可視化する交流活動と4つの視点を用いた振り返り活動を通して

直方市立直方北小学校
教諭 酒井 梢

こんな手立てによって…

一単位時間の道徳の授業で、

- ① 自己を見つめたり、これからの生き方について考えを深めたりする問いの工夫
- ② 自他の思いや考えを可視化するための表現物や操作物の工夫
- ③ 4つの視点を用いた振り返りを位置付けたワークシートの工夫

の3点を行ったことによって

こんな成果があった！

道徳的価値を自分ごととして考え、自分の生活を振り返り、これまでの課題について考えたり、どのような生き方をしたいかを模索したりする児童を育てることができた。

1 考えた

自身の道徳の授業を振り返ると、道徳的価値を児童に自分ごととしてとらえさせることや、児童一人一人がこれからの生き方について考えることが不十分であった。これは、展開前段で、読み物教材の登場人物と自分自身を重ねたり、比べたりすることや、展開前段での活動が精選できていなかったため、展開後段で自分の生き方について個人で考えることが不十分であったからである。そこで、一単位時間の道徳の授業の中で、児童が道徳的価値を自分ごととしてとらえ、教材を通しての道徳的諸価値の理解や多面的・多角的に考えることを通して、これからの生き方について考えを深める学習を行うことが必要であると考えた。

2 やって見た

自己を見つめ、これからの生き方について考えを深める児童を育てるために、以下の手立てを行った。

- ① 自己を見つめたり、これからの生き方について考えを深めたりする問いの工夫
- ② 自他の思いや考えを可視化するための表現物や操作物の工夫
- ③ 4つの視点を用いた振り返りを位置付けたワークシートの工夫

3 成果があった！

教材を読んだときに、自分のこととつなげて考えるようになった児童やこれからどんな自分になりたいか考えることができるようになった児童が増加した。このことから、自己を見つめ、これからの生き方について考えを深める児童を育てることができたといえる。

**自己を見つめ、これからの生き方について
考えを深める児童を育てる道徳科学習指導**

自他の思いや考えを可視化する交流活動と4つの視点を用いた振り返り活動を通して

1	主題設定の理由	3
	(1) 新学習指導要領から	3
	(2) 児童の実態と自身の反省から	3
2	主題の意味	4
	(1) 自己を見つめるとは	4
	(2) これからの生き方について考えを深めるとは	4
	(3) 自他の思いや考えを可視化する交流活動とは	5
	(4) 4つの視点を用いた振り返り活動とは	5
3	研究の目標	5
4	研究の仮説	5
5	研究の構想	6
	(1) 自己を見つめたり、これからの生き方について考えを深めたりする問いの工夫	6
	(2) 自他の思いや考えを可視化するための表現物や操作物の工夫	6
	(3) 4つの視点を用いた振り返りを位置付けたワークシートの工夫	7
	(4) 研究構想図	7
6	研究の実際	8
	(1) 授業実践1	8
	(2) 授業実践2	14
7	成果と課題	22
	(1) 児童の変容から	22
	(2) 成果と課題	24
<参考文献>		25

自己を見つめ、これからの生き方について 考えを深める児童を育てる道徳科学習指導

自他の思いや考えを可視化する交流活動と4つの視点を用いた振り返り活動を通して

直方市立直方北小学校
教諭 酒井 梢

1 主題設定の理由

(1) 新学習指導要領から

平成29年に文部科学省から「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」が公示された。その中で、道徳科は、道徳価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳性を養うことが目標として挙げられている。また、よりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道徳教育が求めるものであると示されている。これらのことから、道徳的価値を自分のこととして捉えた上で、これまでの自分を振り返ったり、これからどのような自分になりたいかを考えたりすることは、道徳科の目標を実現する上で大変意義深い。

(2) 児童の実態と自身の反省から

道徳科の学習に対する課題を明らかにするため、4月に第6学年48名を対象に質問紙による実態調査を実施した。質問紙では、道徳科の目標に明記された4つの学習活動（設問1：道徳的諸価値についての理解、設問2：自己を見つめること、設問3：物事を多面的・多角的に考えること、設問4：自己の生き方についての考えを深めること）について、これまでの道徳の学習を想起させ、4件法で回答を求めた。

その結果、4つの設問について、「当てはまる」と回答した児童は3割以下であった(表1)。特に、「道徳の学習で物語を読んだときには、自分のことにつなげて考えるようにしている。」「道徳の学習では、これからどんな自分になりたいかを考えることができる。」という設問について「当てはまる」と答えた児童は25%以下となった。

		当てはまる	まあまあ 当てはまる	あまり 当てはまらない	当てはまらない
設問1	道徳の学習では、新たな気付きがある。	29	54	10	6
設問2	道徳の学習で物語を読んだときには、自分のことにつなげて考えるようにしている。	23	54	21	2
設問3	道徳の学習では、友達の意見を聞いて、自分の考えが広がったり、深まったりする。	27	44	29	0
設問4	道徳の学習では、これから、どんな自分になりたいかを考えることができる。	21	60	13	6

表1 道徳の学習に関する意識調査の結果 (%)

これらの結果から、自身の道徳の授業を振り返ると2つの課題が明らかとなった。一つは、道徳的価値を児童に自分ごととしてとらえさせることが不十分であったことである。こ

これは、展開前段で、読み物教材の登場人物と自分自身を重ねたり、比べたりすることが不十分であったことである。

二つは、展開前段の活動が精選できていなかったため、展開後段で自分の生き方について個人で考える時間を十分に取れずに、数人の児童に発表させるだけで終わっていたことで、児童一人一人がこれからの生き方について十分に考えることが不十分であったことである。

これらの実態と自身の反省を踏まえ、一単位時間の道徳の授業の中で、児童が道徳的価値を自分ごととしてとらえ、教材を通しての道徳的諸価値の理解や多面的・多角的に考えることを通して、これからの生き方について考えを深める学習を行うことが必要であると見え、本主題を設定した。

2 主題の意味

(1) 自己を見つめるとは

「自己を見つめる」とは、道徳的価値を自分のこととして考えたり、感じたりすることである。具体的には、道徳科の学習において、本時のねらいにかかわる問題意識を掘り起こして、道徳的問題を自分自身の問題と捉えることや、教材をただ読むのではなく、教材の主人公を自分と重ねたり、比較したりして考えることである(図1)。

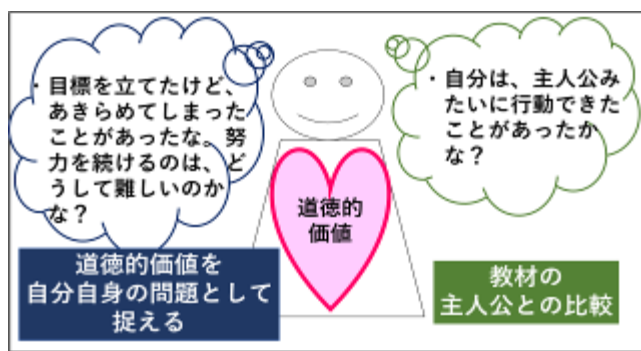


図1 自己を見つめる姿

(2) これからの生き方について考えを深めるとは

「これからの生き方について考えを深める」とは、道徳的価値から自分を振り返り、生き方の課題について考えたり、どのような生き方をしたいかを模索したりすることである(図2)。

そこで、本研究で目指す児童の姿を以下のように設定する。

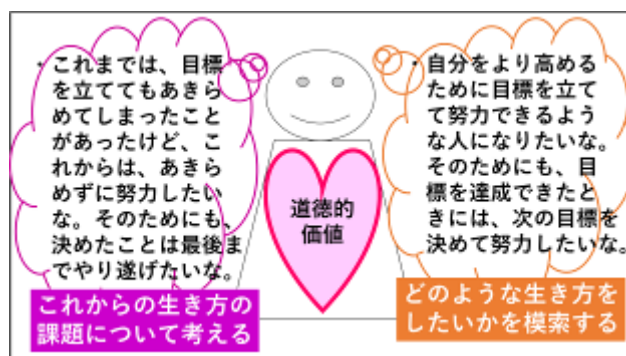


図2 これからの生き方について考えを深める姿

【目指す児童像】

- 道徳的価値を自分のこととして考えたり、感じたりすることのできる児童

【道徳的価値から自己を見つめる姿】

- 道徳的価値から自分を振り返り、これまでの生き方の課題やどのような生き方をしたいかを考えることのできる児童

【これからの生き方について考えを深める姿】

(3) 自他の思いや考えを可視化する交流活動とは

「自他」とは、自分やほかの児童、教材の登場人物や授業で取り上げる先人や偉人のことである。

「自他の思いや考え」とは、教材を通して自分やほかの児童が思考したことや教材の登場人物等が思考したこと、登場人物の道徳的行為を支える動因となったものである。

「自他の思いや考えを可視化する」とは、教材を通して思考したこと等をワークシートや付箋などの表現物や操作物に書き出すことである。

「自他の思いや考えを可視化する交流活動」とは、互いの表現物を比較したり、操作物を整理したりすることによって、自分や他者の考えたことを視覚的にとらえやすくし、考えを伝え合い、共有しながら、自分の考えを広げたり、深めたりする活動である。

自他の思いや考えを可視化する交流活動を位置付けることで、児童が道徳的価値を自分のこととして考えたり、感じたりすることができるようにする。

(4) 4つの視点を用いた振り返り活動とは

「4つの視点」とは、道徳科の目標に明記された4つの学習活動のことである(表2)。

「4つの視点を用いた振り返り活動」とは、道徳科の目標に明記された4つの学習活動を基に、該当学年の発達段階に合わせて設定された視点から児童が一単位時間の道徳の授業を自己評価する活動である。

道徳科の4つの学習活動	
1	道徳的諸価値についての理解
2	自己を見つめること
3	物事を多面的・多角的に考えること
4	自己の生き方についての考えを深めること

表2 道徳科の4つの学習活動

この「4つの視点を用いた振り返り活動」を位置付けることにより、教師が道徳科の目標を意識して、一単位時間の中に4つの学習活動を仕組むことや、児童の自己評価を基に授業改善が行えるようにする。また、児童が道徳科の目標を基に、振り返りを行うことによって、道徳的価値から自分を振り返ることができるようにする。

3 研究の目標

道徳科の学習指導において、自己を見つめ、これからの生き方についての考えを深める児童を育てるために、自他の思いや考えを可視化する交流活動と4つの視点を用いた振り返り活動の有効性を明らかにする。

4 研究の仮説

道徳科の学習指導において、以下のような手立てを工夫すれば、自己を見つめ、これからの生き方についての考えを深める児童が育つであろう。

- 自己を見つめたり、これからの生き方について考えを深めたりする問いの工夫
- 自他の思いや考えを可視化するための表現物や操作物の工夫
- 4つの視点を用いた振り返りを位置付けたワークシートの工夫

5 研究の構想

(1) 自己を見つめたり、これからの生き方について考えを深めたりする問いの工夫

一単位時間の道徳の授業の中で、道徳的価値についての問題を自分自身の問題として捉えさせたり、自己の考えを持たせ、これからの生き方についての生き方について考えさせたりするため、各学習過程において、次の問いを行う。

- 導入段階における「本時のねらいにかかわる問題意識を掘り起こす」ための問い
- 展開前段における「ねらいとする価値に迫るために、自他の思いや考えを比較したり、整理したりする」問い
- 展開後段における「これからの生き方について考えを深める」ための問い

(2) 自他の思いや考えを可視化するための表現物や操作物の工夫

児童が自他の考えを比較して交流することができるように、展開前段において、自分の考えを視覚的に表現できるワークシートを用意する(図3①)。また、自他の考えを操作して整理できるように色付き付箋などの操作物(資料1)を活用する。

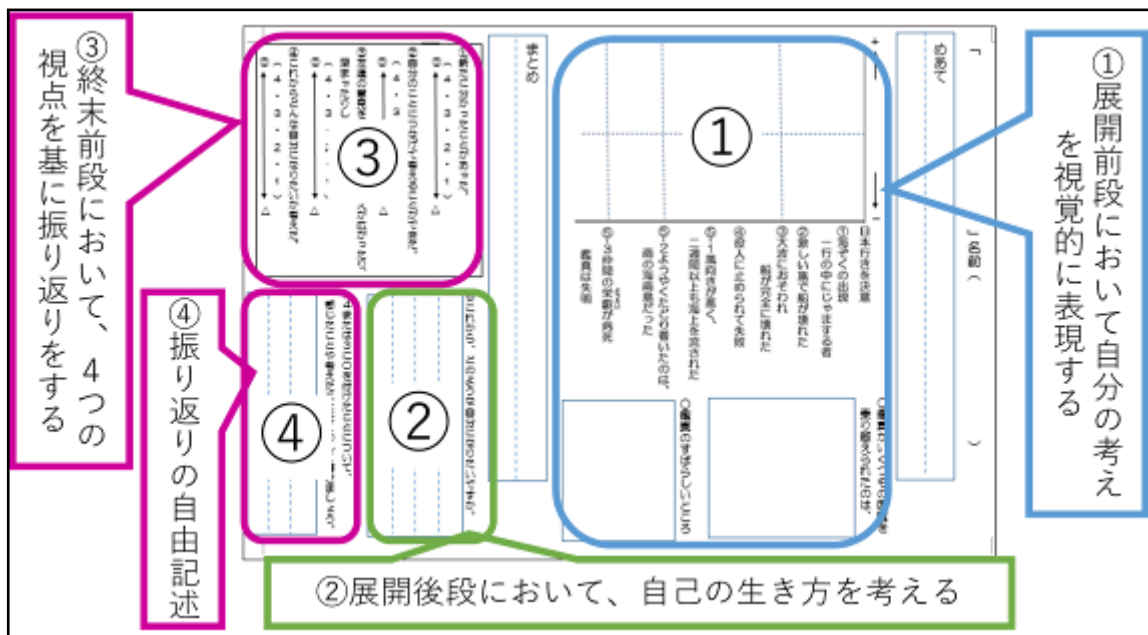


図3 ワークシートの例

色付き付箋

- ・考えを比較できるように、複数枚準備する。
- ・班で考えを分類できるように、貼ってはがせるものを準備する。



資料1 操作物の例

(3) 4つの視点を用いた振り返りを位置付けたワークシートの工夫

児童が4つの視点を用いた振り返りができるように、ワークシートに振り返りの視点とそれぞれの視点について4段階評価をする欄（図3③、図4）と自由記述の欄（図3④）を用意する。振り返りの視点は、本研究では第6学年を対象とするので、道徳科の学習活動を基に、高学年の児童が自己評価できる文言に修正したものを使用する。

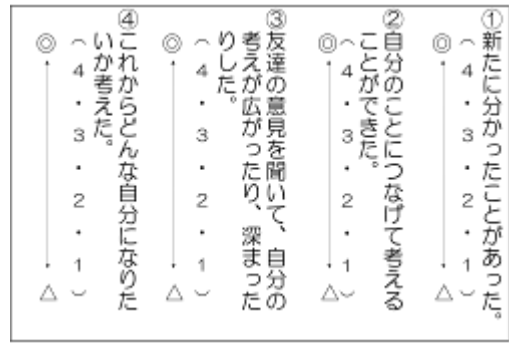


図4 振り返りの視点と自己評価欄

(4) 研究構想図

図5に研究構想図を示す。



図5 研究構想図

6 研究の実際

- 対象 A市立B小学校 第6学年1組(24名)、2組(26名)

(1) 授業実践1

① 教材の概要等

主題名：「目標をもってやりぬく」A－(5)〔希望と勇気、努力と強い意志〕
 教材名：「鑑真和上」(出典 光文書院 ゆたかな心)

【教材の概要】

本教材は、唐の僧侶である鑑真が、仏の教えを日本に広めるため、6回にも及ぶ渡航を試みる話である。6回の10年にも及ぶ渡航では、嵐による船の破損や仲間の死、自身の失明などの困難に直面した。しかし、鑑真はどんな困難に直面してもあきらめず、希望をもってやり遂げるとい話であり、鑑真の強い意志を感じ取ることができる教材である。鑑真の生き方から、高い目標を達成するという希望をもち、努力することの大切さに気付かせたい。

② 本時の展開

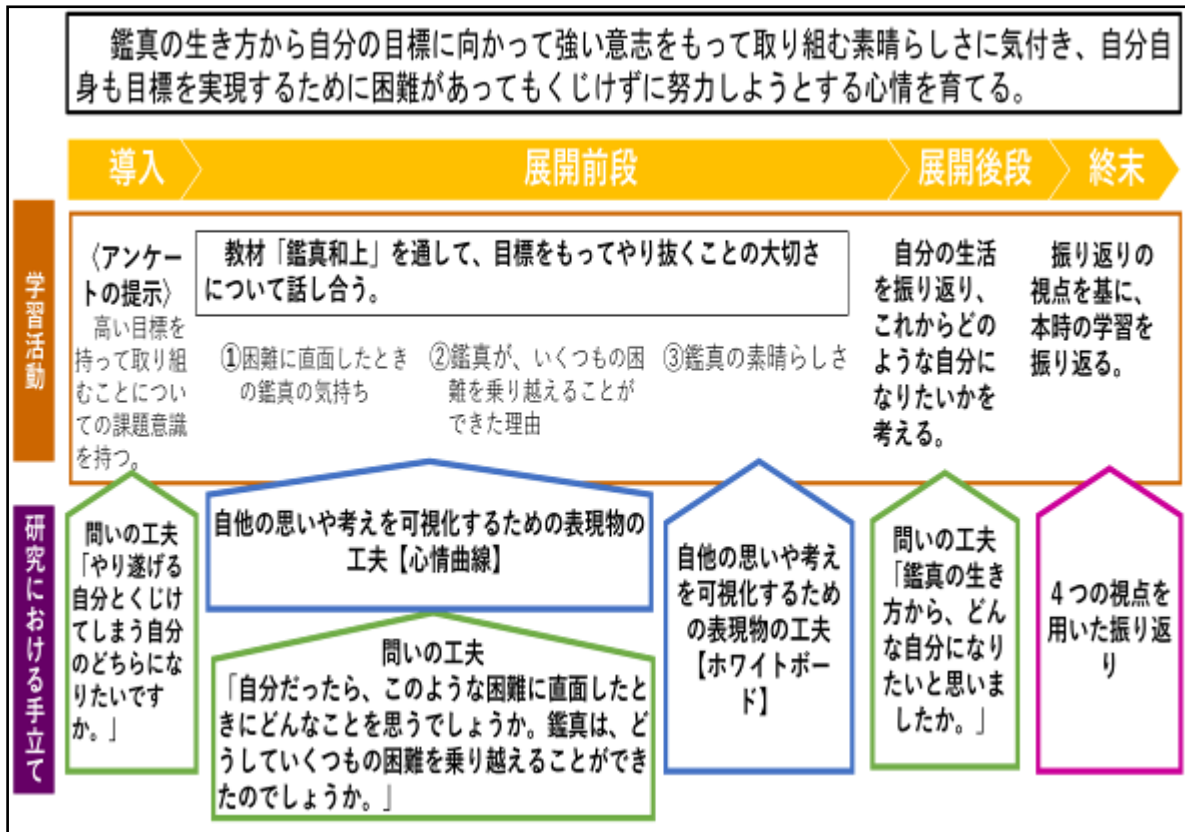
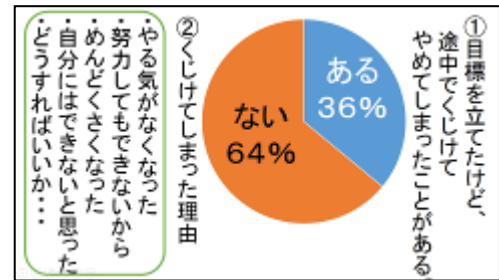


図6 「鑑真和上」における学習活動と手立て

③ 各段階の指導の実際と考察

導入

まず、事前にとったアンケートの結果（資料2）を提示した。アンケートの結果では、「目標を立てたけど、途中でくじけてしまったことがある」という問いに、64%の児童が「ない」と回答していたが、「ある」と回答した児童のくじけてしまった理由を提示し、発問①を行うと、共感する児童の姿が見られた（資料3）。また、発問②を行うと、「やり遂げる自分になりたい。」と答える児童が多く見られた。



資料2 提示したアンケート結果

これは、アンケートの結果を提示することによって、目標を立てたけれど、途中でくじけたことはないと回答した児童も自分の体験を想起し、価値への弱さを自覚することができたと考えられる。また、価値への弱さを自覚したところで、発問②を行ったことで、どのような自分になりたいかを考えることができたと考えられる。

T：「目標を立てたけど、くじけてしまったことがある」と答えた人に、その理由を聞いてみました。
 (アンケート結果の提示して) **発問①**
こんな気持ちになったことはありませんか？

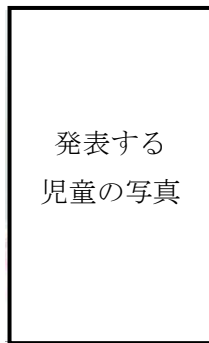
C：ある。
 C：あー、ある。
 T：こんな気持ちになったことがあるんだね。では、目標を立ててやり抜く自分と、途中でくじけてしまう自分だったら、どちらの自分のほうがいい？ **発問②**

C：目標を持っている人。
 C：やり抜く人。

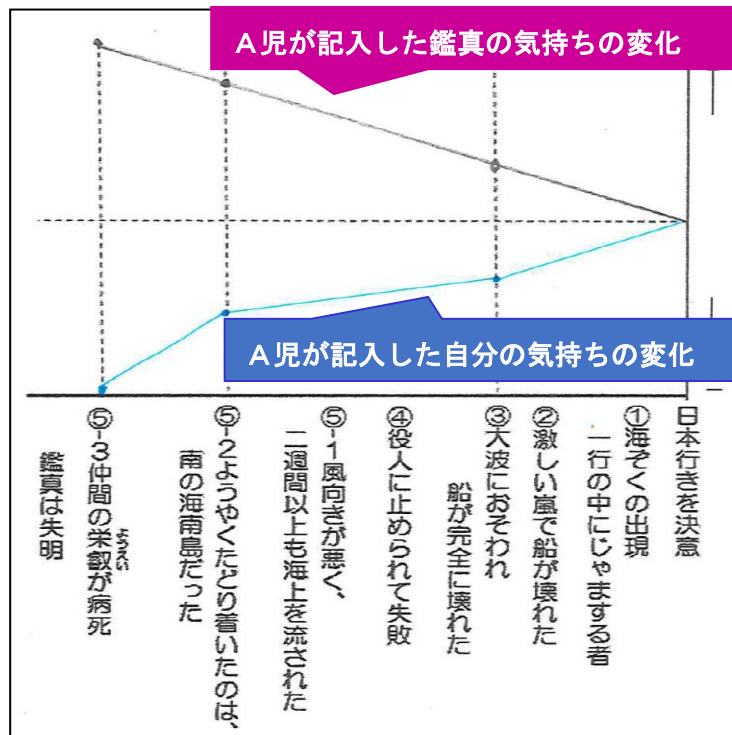
資料3 導入での発問と児童の反応

展開前段

まず、鑑真が困難に直面した時の気持ちを考えさせた。いくつもの困難に直面してもくじけなかった鑑真の気持ちを考えさせるために、困難に直面した時の「日本に行って、仏教を広めよう」という鑑真の気持ちの高まりを心情曲線に記入させ（資料4）、全体で交流させた（資料5）



資料5 発表する児童の様子



資料4 A児が記入した心情曲線

料5)。

次に、「自分が鑑真だったら、こんな困難に直面したら、日本に行こうという思いは、どのくらいでしょうか。」と発問し、児童に、自分が鑑真だったら、困難に直面した時の「日本に行って、仏教を広めよう」という気持ちがどれくらいになるのかを考えさせ、心情曲線に記入させた(資料4、青の折れ線グラフ)。その結果、約9割の児童の心情曲線は、鑑真の曲線を下回るものであった。

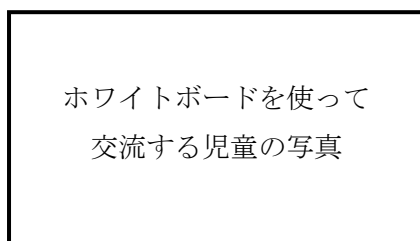
そして、自分が鑑真の立場になったときの気持ちを心情曲線で表現させ、鑑真との思いを比較させた後、発問③を行った(資料6)。その結果、資料6の児童の発言や資料7のように、約9割の児童が、鑑真がいくつもの困難を乗り越えることができた理由を考えることができた。

○鑑真がいくつもの困難を乗り越えられたのは、

これは、心情曲線に鑑真

資料7 児童の記述

の気持ちを記入させた後に、「自分が鑑真だったら…」と自分が鑑真の立場になったときのことを想像させたことが有効であったと考える。



資料9 ホワイトボードを使って交流の様子

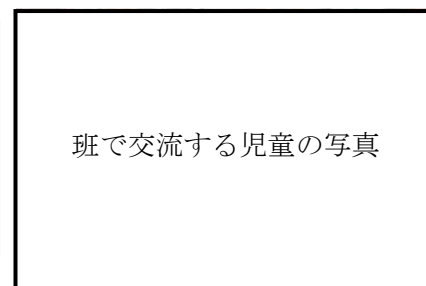
また、鑑真がいくつ

もの困難を乗り越えることができた理由を考えさせた後に、「鑑真の素晴らしいところは、どんなところでしょうか。」と発問を行い、個人で考えさせた後に、グループで交流をさせた(資料8)。グループでの交流後、「目標を持ってやり抜くには、どんなところが大切でしょうか。」と発問し、ホワイトボードを用いて、考えをまとめさせ、全体で交流させた(資料9)。児童は、「あきらめずに何回失敗しても挑戦し続ける心」「くじけずに気持ちを持って、やり遂げようとする心」などを班でまとめることができた(資料10)。全ての班が、ねらいとする道徳的価値に関するキーワードでまとめることができ、児童から出されたキーワ

T: Aさんは、自分が鑑真だったら、失明してしまった時に、日本に行こうという思いが0になると表していますね。どうしてですか?
A児: これ以上、仲間が死んでしまうのもいやだし、もうやめたいと思います。
T: うん。気持ちがぐんと下がっている人が多かったですね。でも、鑑真は、日本に行こうという決意は変わらなかったんですね。どうして、鑑真はいくつもの困難を乗り越えることができたと思いますか? **発問③**
B児: 鑑真は最後まであきらめたくないと思ったから。
C児: 鑑真は、日本人に仏教を知ってほしいという思いがあったから。
D児: 鑑真は、絶対に日本に行こうという思いがあったから。
E児: 鑑真は心が強かったから。
F児: 自分に自信があって、前向きに考えることができたから。
G児: 忍耐力や精神力が強かったから。

発問③に対する児童の反応

資料6 全体交流の様子

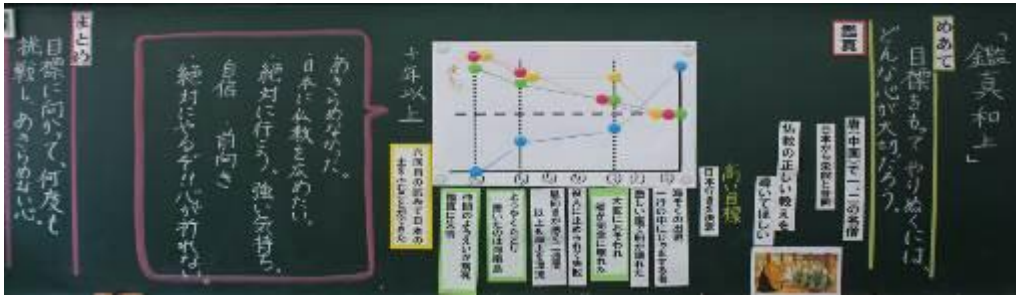


資料8 班で交流の様子



資料10 班でまとめたホワイトボード

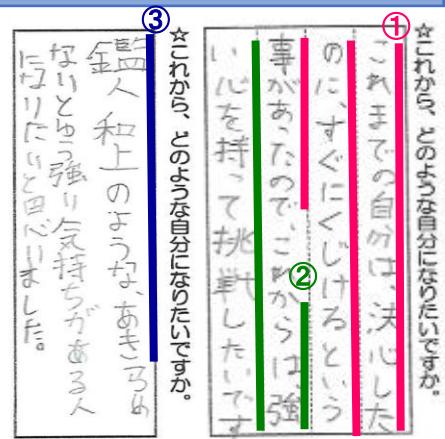
ードを基にまとめを行った。資料 11 に授業の板書を示す。



資料 11 授業の板書

展開後段

「鑑真の生き方から、どんな自分になりたいと思いましたか。」という発問を行った。その結果、これまでの自分を振り返って、これまでの自分の課題(資料 12 ①)やこれからどのような自分になりたいかを考えさせることができた(資料 12 ②)。また、鑑真のようになりたいと思いを持つ児童も見られた(資料 12 ③)。これは、心情曲線で鑑真と自分を比較したり、班でホワイトボードを用いて交流したりすることにより、鑑真と自分をつなげて考えることができたためといえる。



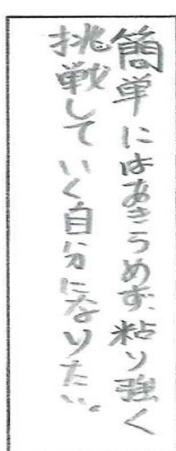
資料 12

児童の展開後段での記述

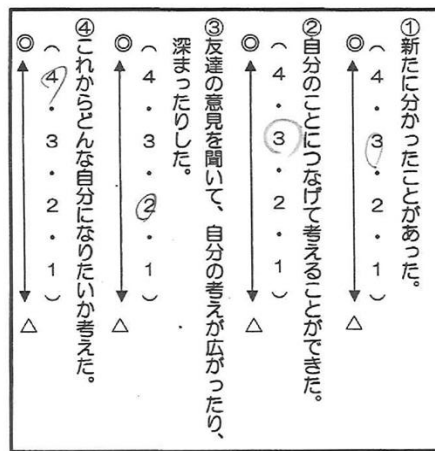
終末

4つの視点を基に、児童に4段階評価で振り返りを行わせた(資料 13)。また、4または3をつけた項目については、自由記述で振り返りを書かせた(資料 14)。

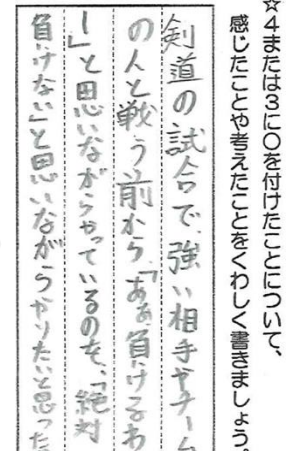
展開後段 終末



資料 15 A児の展開後段での記述



資料 13 A児の自己評価



資料 14 A児の振り返り

A児は、4つの学習活動の中でも、特に「自己の生き方についての考えを深めること」について高い評価をしていた（資料14）。A児は、展開後段で、資料15のように記述していたことから、鑑真の生き方に触れたことにより、これからどのような自分になりたいかを考えることができ、自分の生活を振り返り、課題に気付くことができたと考えられる。

④ 授業実践1の考察

ア 自己を見つめたり、これからの生き方について考えを深めたりする問いの工夫

表3は、「鑑真和上」の学習で行った主な発問である。

児童の自己評価を集計した結果、「自分のことにつなげて考えることができた」と肯定的に評価した児童は、8割いた(図7)。これは、導入段階での発問を意図的に行ったことによって、道徳的価値を自分の問題としてとらえることができたためと考える。

また、「これからどんな自分になりたいか考えた」と肯定的に評価した児童は、87%いた。これは、展開後段での発問を行ったことによって、児童がこれまでの課題やこれからの生き方について考えることができたからであると考えられる。しかし、展開後段における児童の記述は、具体的な場面を考えて書かれているものが少なかった。そこで、児童が具体的な場面でこれまでの行動を振り返り、これからどのような自分になりたいかを考えることができる発問を検討する必要がある。

段階	発問のねらい	実際の発問
導入	本時のねらいにかかわる問題意識を掘り起こす	目標をもってやり抜く自分と、くじけてしまう自分のどちらになりたいですか。
展開前段	ねらいとする価値に迫るために、自他の思いや考えを比較したり、整理したりする	自分だったら、このような困難に直面したときにどんなことを思うでしょうか。鑑真は、どうしていつもの困難を乗り越えることができたのでしょうか。
展開後段	これからの生き方について考えを深める	鑑真の生き方から、どんな自分になりたいと思いましたか。

表3 「鑑真和上」の学習で行った発問

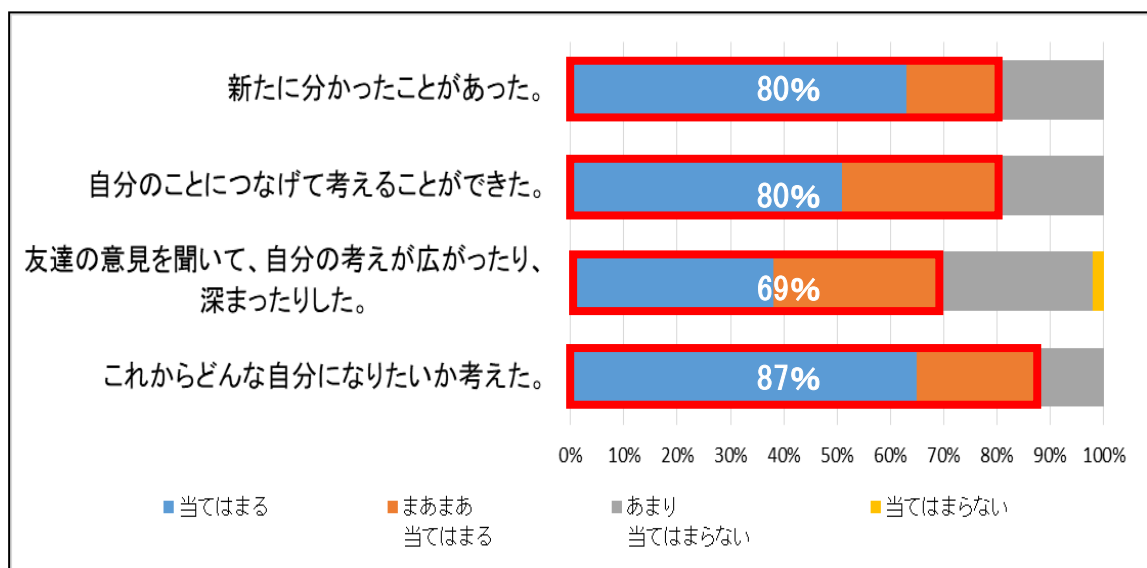


図7 児童の自己評価の結果

イ 自他の思いや考えを可視化するための表現物や操作物の工夫

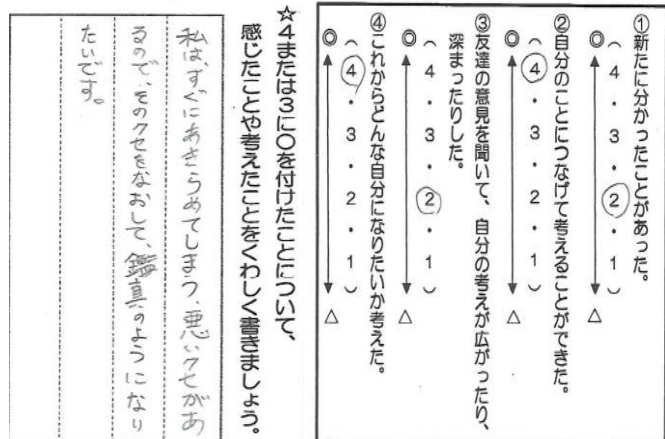
「鑑真和上」の学習では、個人の考えを表現するために心情曲線と、班の考えをまとめるためにホワイトボードを用いた。心情曲線では、全員の児童が鑑真の気持ちを想像したり、自分が鑑真だったらと想像したりして心情曲線を記入することができた。また、ホワイトボードを使った話し合いでは、全ての班が考えをまとめることができた。しかし、「友達の意見を聞いて、自分の考えが広がったり、深まったりした」の設問に肯定的に評価した児童は、69%であった。これは、班で話し合う際に、個人の意見を交流した後に、ホワイトボードで考えをまとめさせたため、交流を通して考えが広がったり、深まったりすることが難しかったからであると考ええる。また、考えをまとめる活動で終わってしまったことで、交流を通して自分の考えが変化しても、元の考えに付加・修正することができなかつたためであると考ええる。

ウ 4つの視点を用いた振り返りを位置付けたワークシートの工夫

4つの視点を用いた振り返りを位置付けたワークシートを用いることによって、資料16のように、個々の学びの成果と課題が明らかになった。

また、3または4と評価した内容については、資料17のように、自由記述をさせたことで、児童が4つの学習活動のどこで深く考えたのかを把握することができた。

また、児童の自己評価を分析することで、一単位時間の道徳の授業の課題が明らかとなった。「鑑真和上」を用いた授業では、「友達の意見を聞いて、考えが広がったり、深まったりすること」が課題として明らかとなった。そのため、「自他の思いや考えを可視化するための表現物や操作物の工夫」として、児童が他者との交流を通して、考えが広がったり、深まったりするような表現物や操作物の選定に重点を置いて、授業実践2を行う。



(2) 授業実践2

① 教材の概要等

主題名：「真心をこめる」A－(2)〔正直、誠実〕
 教材名：「本屋のお姉さん」(出典 光文書院 ゆたかな心)

【教材の概要】

本教材は、雨の日に本屋さんに母の注文した本を受け取りに行くように頼まれたぼくが、本屋のお姉さんの働きぶりを見て、温かい気持ちになるという話である。本屋のお姉さんは、ぼくが受け取る予定の本を一生懸命に探してくれるが、本屋のおじさんから多くの業務を頼まれる。そのような中でも、本屋のお姉さんは、お客さんに明るく接する。ぼくが受け取る予定の本は、結局見つからず、雨の中、駅に向かって歩いていると、本屋のお姉さんが走って本を届けてくれるという内容である。本屋のお姉さんの行動から、真面目に行動することの大切さに気付かせたい。

② 本時の展開

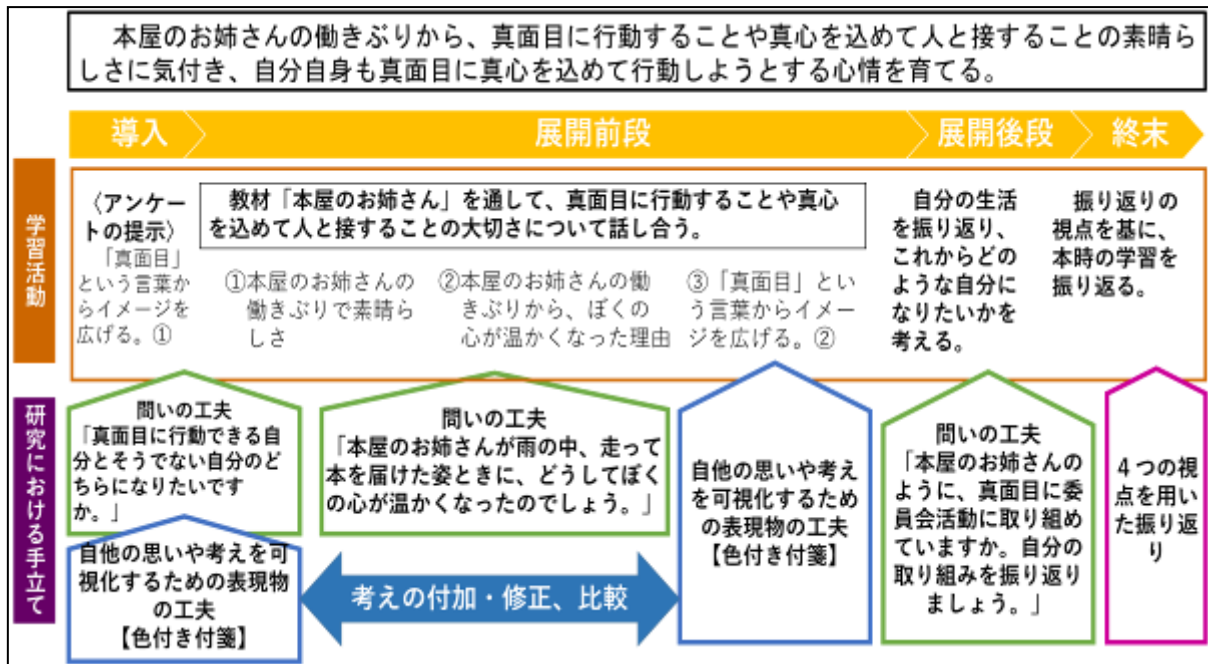


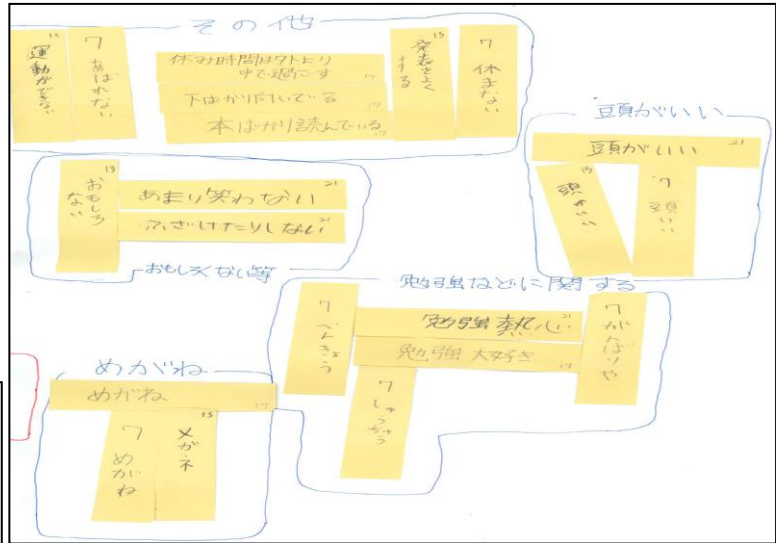
図8 「本屋のお姉さん」における学習活動と手立て

授業実践2では、授業実践1の課題を踏まえ、自他の思いや考えを可視化するための表現物や操作物の工夫として、導入と展開前段で色付き付箋を用いる。教材を通して「真面目に行動する」ことについて考えた前後で、「真面目」という言葉に対するイメージを書き出し、班で分類整理させることにより、導入ではイメージしていなかったことを付加・修正させたり、導入と展開前段での考えの変化を比較したりできるようにする。

③ 各段階の指導の実際と考察

導入

まず、「真面目」という言葉からイメージできることを黄色の付箋に書き出させ、資料 18 のように班で分類をさせた。その結果、「頭がいい」「ふざけない」「勉強が好き」などのイメージが多く出された(図 9)。



資料 18 児童が分類した付箋

- T: 「真面目」という言葉から、どんなことをイメージしますか？
 C: 頭がいい。
 C: 勉強ができる。
 C: ふざけない。
 C: 眼鏡をかけている。
 T: 固いイメージがしますか？ やわらかいイメージがしますか？ **発問④**
 C: 固い。
 T: 暗いイメージがしますか？ 明るいイメージがしますか？ **発問⑤**
 C: 暗い。
 T: では、真面目に行動できる自分とそうでない自分なら、どちらのほうがいいですか？ **発問⑥**
 C: 真面目に行動できる自分。
 T: 「真面目」と聞いて、暗いとか、固いというイメージがあるのに、真面目な自分のほうがいいんですか？ **発問⑦**
 C: っーん…。
 T: では、真面目に行動するとはどういうことなのか考えていきましょう。

資料 19

導入での発問と児童の反応

そこで、発問④、⑤、⑥を行った(資料 19)。すると、「真面目」という言葉に対して、「固い、暗い」というイメージを持ちながらも、「真面目に行動できる自分になりたい。」と答える児童が多く見られた。

続けて、発問⑦を行うと、多くの児童は返答に悩む姿が見られた。そこで、「真面目に行動するとは、どういうことなのか考えよう。」というめあてにつなげた。

導入での様子から、児童は「真面目」について偏ったイメージを持っているが、「真面目に

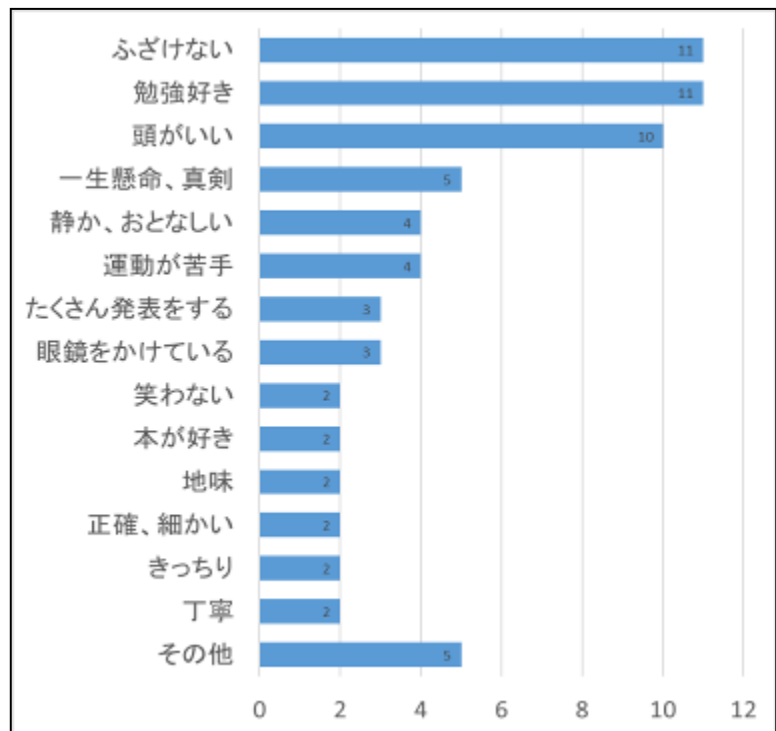


図 9 児童が分類した内容の結果

行動したい」という思いは持っていたことが明らかとなった。

展開前段

教材「本屋のお姉さん」の範読を聞かせた後に、本屋のお姉さんの働きぶりによいと思うところを考えさせた。児童は、「人のことを自分のことのように考えて行動するところ。」「一生懸命なところ」「本屋のおじさんに注意されてもいやな顔をせずに、笑顔で対応したこと」「子どものぼくにも丁寧に対応してくれたこと」などを挙げていた。

T：本屋のお姉さんが、雨の中、走って本を届けてくれたとき、ぼくの心が温かくなったのは、どうしてでしょうか？

C：いろいろなお客さんがいて忙しいのに、**発問⑧** 一人一人に丁寧に対応しているところです。

C：相手のことを考えていると感じたからです。

C：お客さんはたくさんいたのに、自分のために探してくれたからです。

C：子どものぼくにも、丁寧に対応してくれたからです。

C：本が見つかったことがぼくよりうれしそうだったからです。

T：誰に対しても丁寧に接していますね。まだありますか？

C：雨の中、走って持ってきてくれたからです。

C：しかも、雨に濡れないように、ビニール袋に入れて持ってきてました。

T：本屋のお姉さんは、どんな状況でも相手のことを考えて行動していますね。では、**真面目**という言葉からどんなことをイメージしますか？授業の最初と変わりましたか？

C：変わった！ **発問⑨**

T：今度は、ピンク色の付箋に書き出してみましよう。

資料 20 展開前段での発問と児童の反応

○本屋のお姉さんの働きぶりによいところ

○ぼくの心が温かくなったのは、なぜでしょうか。

○どんなお客さんでも明るく笑顔で対応するところ

○色々なお客さんでいそがしかったのに、整理しておいておまわりするね」といわれたところ

○色々なお客さんでいそがしいのに、一人一人に丁寧に対応しているところ

○雨のことを考えてぬれないうちにビニール袋に入れておいてくれるところ

○お客さんのことを考えて

資料 21

児童のワークシートの一部

班で付箋を分類する
児童の写真

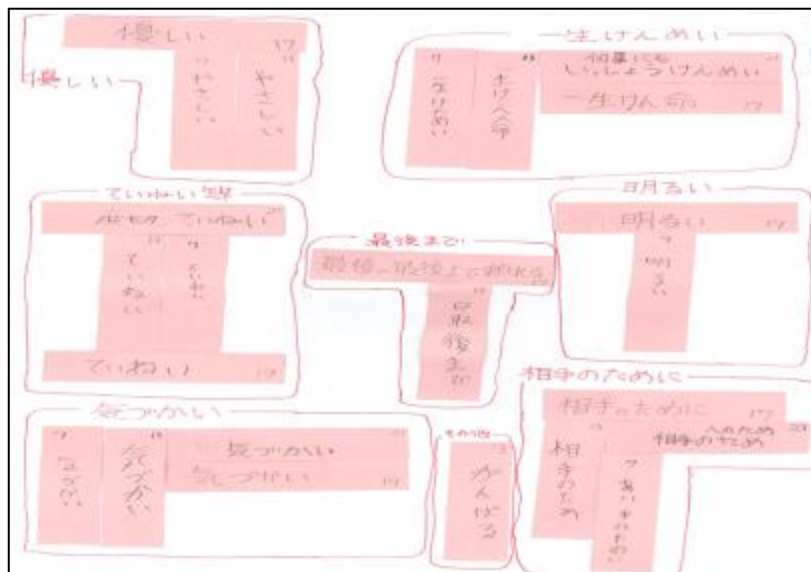
資料 22

班で付箋を分類する様子

次に、発問⑧を行った（資料 20）。児童は、本屋のお姉さんの働きぶりから考えたことをもとに、主人公の心が温かくなった理由を考えることができた。その後、発問⑨を行ったところ、教材を学習する前と後では、「真面目」についてのイメージが変わったという発言する児童が多くいた。そこで、導入の時と付箋の色を変えて、「真面目」という言葉からイメージすることを書き出させ、班で分類させた（資料 22）。資料 23 は、班で付箋を分類したものである。その結果、「真面目」という言葉からイメージすることとして、導入時は、「ふざけない」「勉強が好き」「頭がいい」などが多く挙げ

られていたが、教材「本屋のお姉さん」を通した学習の後には、「相手のことを考える」「優しい」「丁寧」「いつも明るい」などが多く挙げられた(図10)。

教材「本屋のお姉さん」を通して、本屋のお姉さんの働きぶりや主人公の気持ちが温かくなった理由を考えさせたことによって、児童の「真面目」に対するイメージが変化した。また、付箋に書き出させ、班で分類させることによって、最初の考えと変化していることを視覚的にとらえることができた(資料24)。



資料23 展開前段において班で分類した付箋

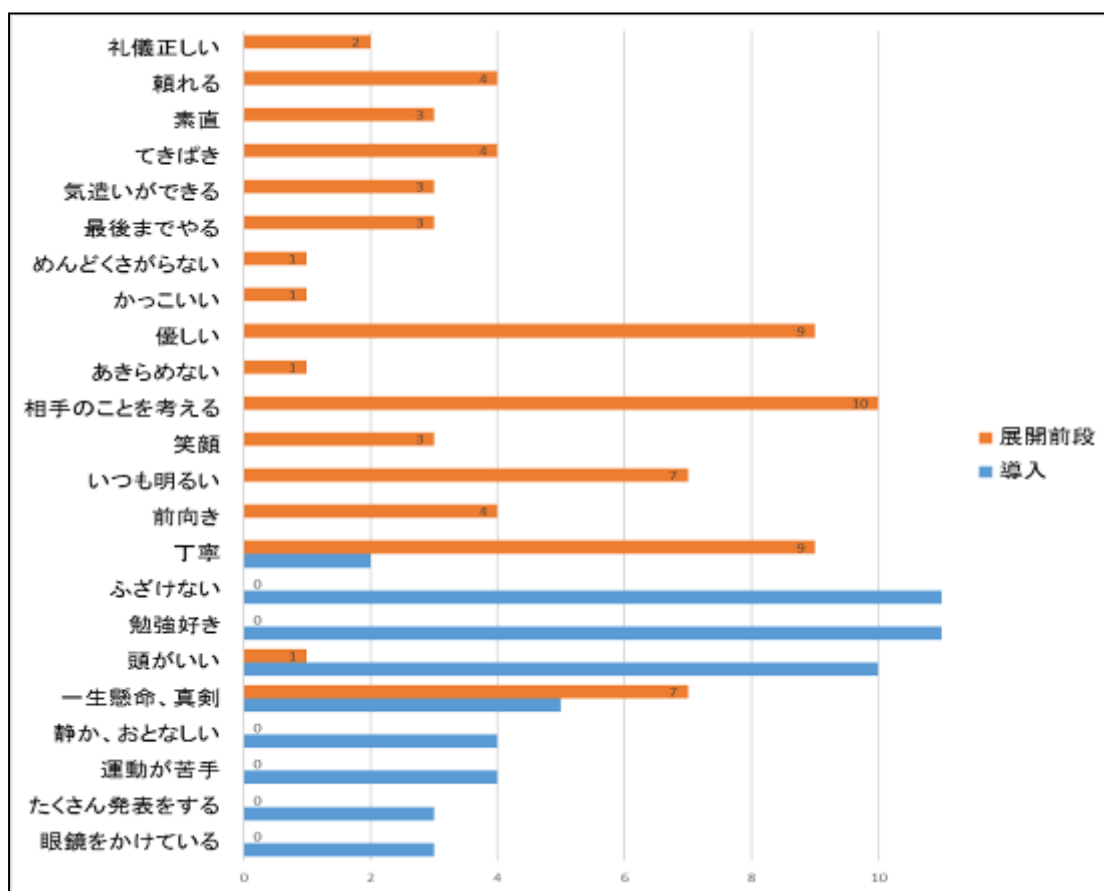
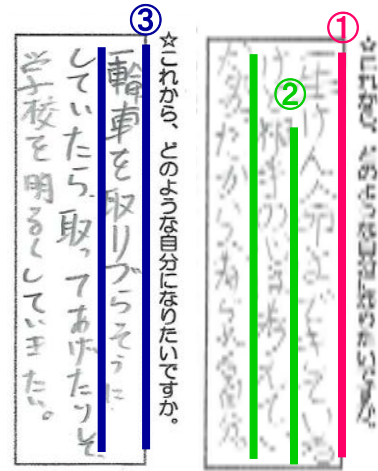


図10 児童が分類した結果

展開後段

「本屋のお姉さんの学習を通して、どんな自分になりたいと思いましたか。委員会の仕事を振り返ってみましょう。」という発問を行った。その際、展開前段で児童から出された「相手のことを思って」「心を込めて」「一生懸命」を取り上げ、その3点について振り返らせた。

その結果、これまでの自分を振り返って、できていたこと（資料 26 ①）と自分の課題（資料 26 ②）を考えさせることができた。また、自分が委員会活動の際に、相手のことを考えて行動できる場面を具体的に想起して、どのような行動をしたかを考える姿も見られた（資料 26 ③）。これは、自分の生活を振り返る際に、委員会活動の場面を想起させたため、より具体的に自分の課題やこれからどのような行動をしたか考えることができたためといえる。

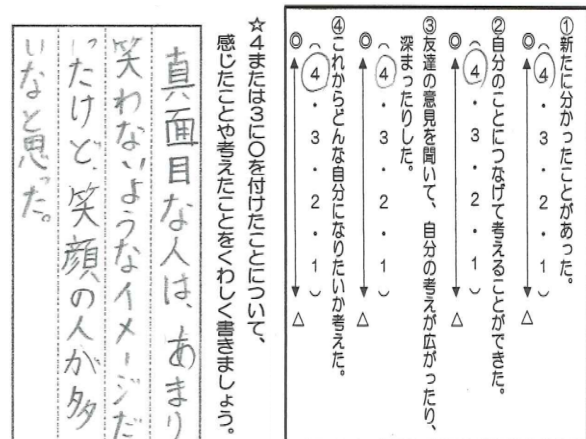


資料 26 児童の記述

終末

4つの視点を基に、児童に4段階評価で振り返りを行わせた。授業実践1と同様に、4または3をつけた項目については、自由記述で振り返りを書かせた。

B児は、どれも4を付けていたが、新たに分かったことや広がった考えを基に、自分の周りの友達で真面目だと思ふ人を想起して、自分の考えの変化を記述することができた（資料 27）。



資料 27 B児の自己評価と振り返り

④ 授業実践2の考察

ア 自己を見つめたり、これからの生き方について考えを深めたりする問いの工夫

表4は、「本屋のお姉さん」の学習で行った主な発問である。

段階	発問のねらい	実際の発問
導入	本時のねらいにかかわる問題意識を掘り起こす	真面目に行動できる自分とそうでない自分なら、どちらの自分のほうがいいですか。
展開前段	ねらいとする価値に迫るために、自他の思いや考えを比較したり、整理したりする	本屋のお姉さんが、雨の中、走って本を届けてくれたとき、ぼくの心が温くなったのは、どうしてでしょうか？ 「真面目」という言葉からどんなことをイメージしますか？授業の最初と変わりましたか？
展開後段	これからの生き方について考えを深める	本屋のお姉さんの学習を通して、どんな自分になりたいと思いましたか。委員会の仕事を振り返ってみましょう。

表4 「本屋のお姉さん」の学習で行った発問

児童の自己評価を集計した結果、「自分のことにつなげて考えることができた」と肯定的に評価した児童は、76%であった（図 11）。これは、導入段階で「真面目」からイメージすることを書き出し、分類させた後で発問を行ったが、この段階では「真面目」な行動について偏ったイメージをしていたため、肯定的に評価した児童が8割未満にとどまったと考えられる。

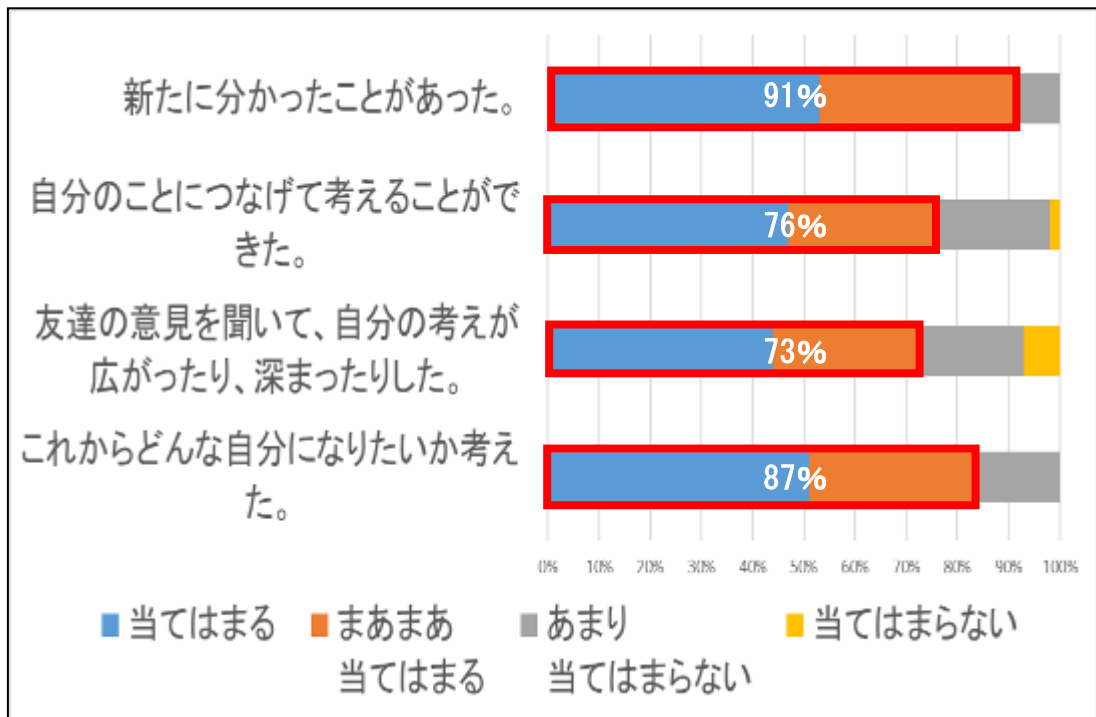


図 11 児童の自己評価の結果

しかし、「これからどんな自分になりたいか考えた」と肯定的に評価した児童は、87%いた。これは、展開後段で委員会活動の場面を想起させて、これまでの生活について振り返らせたことによって、児童がより具体的な場面での課題やこれからどんな行動をしたいのかを考えることができたと考えられる。

イ 自他の思いや考えを可視化するための表現物や操作物の工夫

「本屋のお姉さん」の学習では、色付き付箋を用いて、イメージしたことを書き出して、班で分類させた。導入でも展開前段においても、全員の児童が付箋に、「真面目」という言葉からイメージすることを書き出すことができた。

児童の自己評価では、「新たに分かったことがあった」という設問に対して肯定的な評価をした児童は91%であった。これは、導入と展開前段での考えを付箋に書き出し、分類することによって、考えの変化や導入では出てこなかった考えを視覚的にとらえやすくなり、道徳的価値の理解につながったと考えられる。

「友達の意見を聞いて、自分の考えが広がったり、深まったりした」の設問に対して、4を付けた児童の振り返りからは、付箋を用いた交流が有効であったことがうかがえる（資

料 28)。

しかし、まだ「友達の意見を聞いて、自分の考えが広がったり、深まったりした」の設問では、肯定的な評価が8割に満たないため、児童の考えが広がったり、深まったりする表現物や操作具の検討が必要である。

☆4または3のFOを付けたことについて、
感じたことや考えたことをくわしく書きましよう。

① 新たに分かったことがあった。 ○ (4 . 3 . 2 . 1) Δ	② 自分のことについて考えて考えることができました。 ○ (4 . 3 . 2 . 1) Δ
③ 友達の意見を聞いて、自分の考えが広がったり、深まったりした。 ○ (4 . 3 . 2 . 1) Δ	④ これからどんな自分になりたいか考えた。 ○ (4 . 3 . 2 . 1) Δ

班の交流で、友達か言ってきた
ことから、考え方が新たに生まれ、
最初と最後で全くちがう
考えが生まれていく。

資料 28 児童の自己評価と振り返り

ウ 4つの視点を用いた振り返りを位置付けたワークシートの工夫

授業実践1と同様、4つの視点を用いた振り返りを位置付けたワークシートを用いることによって、図11や資料28のように、学級全体や個々の学びの成果と課題が明らかになった。

7 成果と課題

(1) 児童の変容から

図 12 から図 15 は、授業実践を行う前と実践後の道徳科の 4 つの学習活動についての児童の変容である。

① 道徳的諸価値についての理解

「道徳の学習では、新たな気付きがある」と回答した児童は、実践前は 83%であったが、実践後は 92%となった。

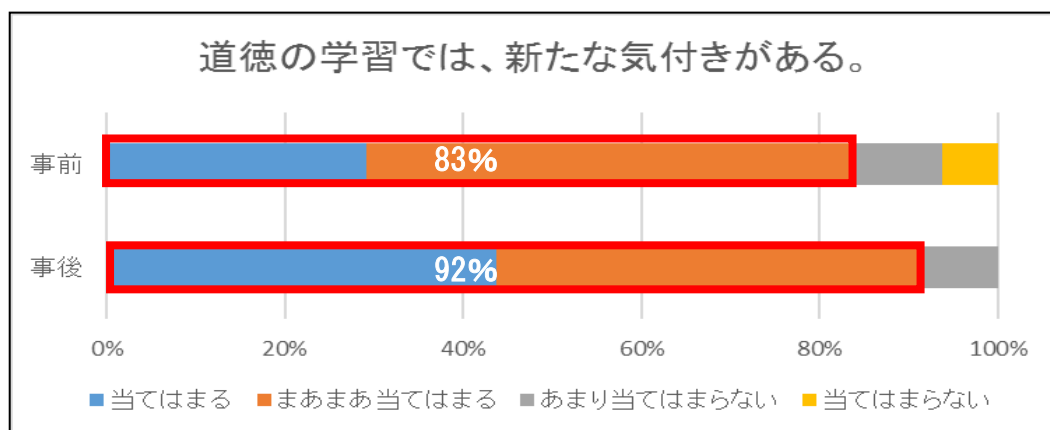


図 12 道徳的諸価値に理解についてのアンケート結果

② 自己を見つめること

「道徳の学習で物語を読んだときには、自分のこととつなげて考えるようにしている」と回答した児童は、実践前も実践後も 77%であった。しかし、肯定的な回答をした児童の中で、「当てはまる」と回答した児童は、23%から 31%になっており、伸びが見られた。また、「当てはまらない」に回答する児童は、0%であった。

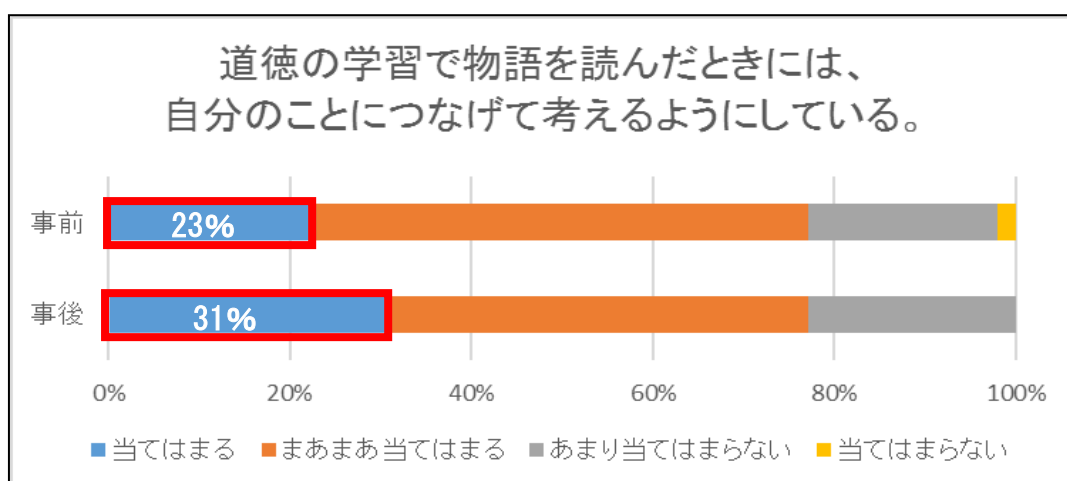


図 13 自己を見つめることについてのアンケート結果

③ 物事を多面的・多角的に考えること

「道徳の学習では、友達の見解を聞いて、自分の考えが広がったり、深まったりする」と回答した児童は、実践前は71%であったが、実践後は89%であった。

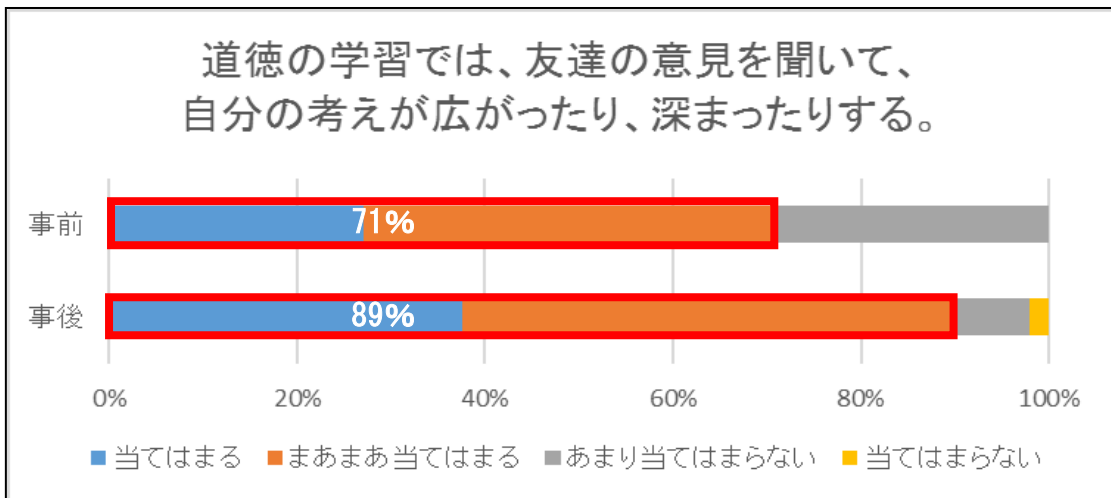


図 14 物事を多面的・多角的に考えることについてのアンケート結果

④ 自己の生き方についての考えを深めること

「道徳の学習では、これからどんな自分になりたいか考えることができる」と回答した児童は、実践前は81%であったが、実践後は88%であった。

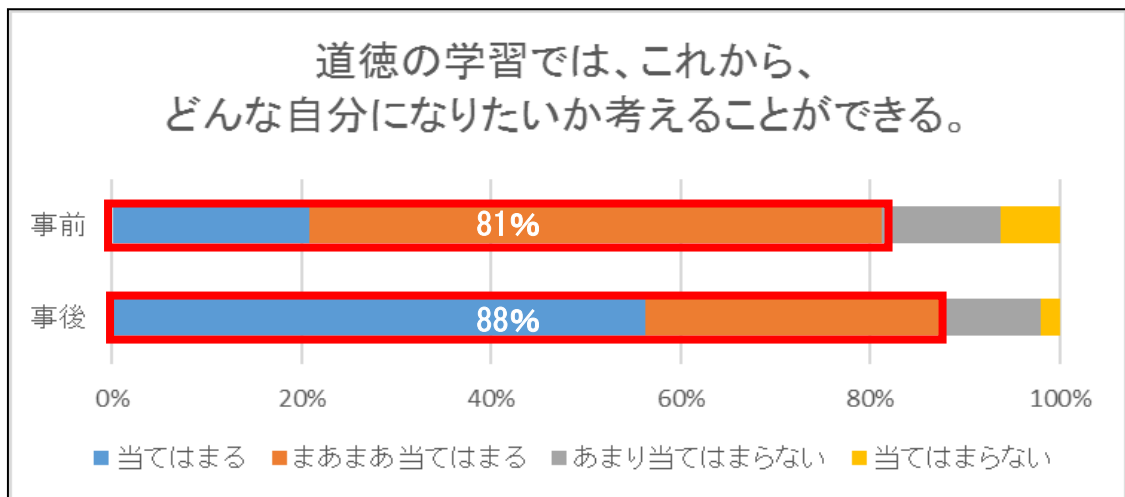


図 15 自己の生き方についての考えを深めることについてのアンケート結果

(2) 成果と課題

アンケート結果から、4つの「自己を見つめ、これからの生き方について考えを深める児童」を育てることができたと考えられる。これは、次の手立てが有効であったためと考えられる。

① 自己を見つめたり、これからの生き方について考えを深めたりする問いの工夫

各段階において、表5のような問いを行ったことで、ねらいにかかわる問題意識を掘り起こしたり、これからの生き方について考えを深めたりすることができたと考えられる。

段階	発問のねらい
導入	本時のねらいにかかわる問題意識を掘り起こす
展開前段	ねらいとする価値に迫るために、自他の思いや考えを比較したり、整理したりする
展開後段	これからの生き方について考えを深める

表5 各学習過程における発問のねらい

② 自他の思いや考えを可視化するための表現物や操作物の工夫

心情図や色付き付箋を用いることによって、児童が考えたことを可視化することができた。児童の思考を可視化することで、自分と教材の主人公の思いを比較したり、自分の考えが変化したことをとらえやすくなったりしたと考えられる。

③ 4つの視点を用いた振り返りを位置付けたワークシートの工夫

4つの視点を用いた振り返りを位置付けたワークシートを用いることによって、一単位時間の中で児童がどの学習活動で考えたかを把握することができ、授業改善につなげることができた。

研究の課題としては、次の二点がある。一つは、教材や発達段階によった表現物や操作物の工夫を明らかにすることである。教材の内容や児童の発達段階によって、有効な表現物や操作物は異なると考えられるので、実践を重ねてどのような表現物や操作物が有効か検討していく必要がある。二つは、児童の発達段階に応じた自己評価の内容について検討することである。4つの視点を用いた振り返りの文言を中学年や低学年でも活用できるものに改良し、他学年でも活用できるようにする。

<参考文献>

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』（平成29年）
- ・福岡県教育委員会（平30）『道徳教育実践ハンドブック vol. 2』
- ・東洋館出版社（平27）『初等教育資料 「特別の教科 道徳」の実施に向けて』